埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

A Study of the Collaborative Class between the Fields of “Human Relations” and “Language” : Exploring the Realization of a Sense of Morality from Children's Language

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2022-02-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 三浦, 正雄, 生野, 金三
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1434

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

領域「言葉」と領域「人間関係」との連携授業の研究
― 子供の言葉より道徳性の芽生えを探る ―

A Study of the Collaborative Class between the Fields of
"Human Relations" and "Language"
Exploring the Realization of a Sense of Morality from Children's Language

三　浦　正　雄・生　野　金　三
MIURA, Masao　SHONO, Kinzo

Ⅰ　はじめに

平成29年に改訂された「幼稚園教育要領」においては、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下「10の姿」と略す）」が新たに掲げられている。この「10の姿」は、５領域に示す「ねらい」及び「内容」に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園終了時の具体的な姿であり、指導者である教師が指導を行う際に考慮するものである。「10の姿」の中に、「（４）道徳性・規範意識の芽生え」という内容があり、そこでは、友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、決まりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、決まりをつくったり、守ったりするようになる[1)]。としている。ここでは、①主として自分自身に関すること、②主として人との関わりに関すること、③主として集団との関わりに関すること等が述べられている。①は、自分の在り方を自分自身との関わりで捉える内容であり、特にここではしてよいことと悪いことを区別したり、判断したりする力に関する内容である。②は、自己を人との関わりにおいて捉え、望ましい人間関係の構築を図ることに関する内容である。特にここでは、自分とは異なる考えも心で受け止め、相手への理解を深めるという相互理解に関する内容である。③は、自己を様々な集団との関わりにおいて捉え、社会の形成者としての道徳性の芽生えを培うことに関する内容である。特にここでは、所属する集団を構成する一員として約束や決まりを守ったり、決まりをつくったりという規律の尊重に関する内容である。

道徳性の芽生えをめぐっては、領域「人間関係」の中で特に重要視されている。それは、領域「人間関係」の「内容の取扱い」の（４）に、

キーワード：言葉、人間関係、連携授業、道徳性
Key words　：language, human relations, collaborative class, morality

> 道徳性の芽生えを培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、幼児が他の幼児との関わりの中で他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること[2)]。

とある。ここでは、「自然や身近な動植物に親しむ」とあり、自然の美しさに触れたり、身近な動植物に親しみ、世話をしたりする中で、生命あるものへの感性、弱いものをいたわる気持ちなどを育てることを願っている。領域「人間関係」においては、道徳性の芽生えを培うに当たって、生命や自然との関わりに関する内容も取り上げられている。これを含めて、前述の①②③の内容は、小学校及び中学校の「特別の教科　道徳」においても取り上げ、重要視されている。このような意味で、幼児期の経験は、小学校生活において、初めて出会う人の中で、幼児期の経験を土台にして、相手の気持ちを考えたり、自分の振る舞いを振り返ったり等しながら、気持ちや行動を自立的に調整し、学校生活を楽しくしていこうとする姿へつながっていく[3)]のである。このようなことからも幼稚園及び保育所において道徳性の芽生えを培うことの重要性が理解できよう。道徳性の芽生えを培うことは、基本的な生活習慣の形成において、自立心を育み、自己抑制の調和のとれた自律性を育てることと深く関わる[4)]のである。

以上のことを踏まえ、以下においては幼児が使用している言葉を基に、道徳性の芽生えがいかに育っているかその様相を考えてみる。

Ⅱ　道徳性の芽生えを探るに当たっての基本的な考え方

道徳性は、人間としての本質的な在り方やよりよい生き方を目指してなされる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基礎をなすものである[5)]。言ってみれば、道徳性とは人間にとって良く生きるための基礎・基本となるものである。幼稚園及び保育所は、乳幼児が生涯にわたる人間形成の基礎を培う極めて重要な時期である。このようなことを踏まえるとき、幼稚園及び保育所においても乳幼児に相応しい道徳性を生活の中で身に付けるような指導を行っていく必要があろう。そのことは、前述の如く領域「人間関係」（幼稚教育要領）の内容の取扱い」の（４）に、「道徳性の芽生えを培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに」とあり、道徳性に結び付けてその基礎を培うことを強調している。

1　道徳性について

道徳性をめぐっては、「小学校学習指導要領特別の教科　道徳編」において、

> 道徳性とは、人間としての本来的な在り方やよりよい生き方を目指してなされる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基礎をなすものである[6)]。

と定義されている。この道徳性は、一般的には道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度によって構成されていると言われている。

まず、道徳的心情であるが、それは道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情のことであり、人間としてのよりよい生き方や善を志向する感情である

とも言える。この道徳的心情は、道徳的行為への動機として強く作用するものである。次いで、道徳的判断力であるが、その力を有すれば様々な場面において善であるのか悪であるのかを判断することが可能となる。この力は、人間として望ましい生き方をしていくために必要不可欠な能力である。今日、指示待ち人間が多いと指摘されているが、道徳的判断力を育てることは、主体的に生きるためにとても重要なことである。最後に、道徳的実践意欲と態度であるが、それは道徳的心情や道徳的判断力を基礎として道徳的価値を実現しようとする意志の働きであり、道徳的態度は、それらに裏付けされた具体的な道徳的行為への身構えと言うことができる[7)]。

以上、道徳性の特徴について概観してきたが、この道徳性を如何なる場面で発展させ、身に付け、人格を形成するかについて見てみる。この視点は、幼児の言葉を分析する際、極めて重要な手掛かりを与えてくれる。その視点であるが、前述の①主として自分自身に関すること、②主として人との関わりに関すること、③主として集団との関わりに関すること等に加えて、④主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関することである。これは、生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にしたり、自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にしたり、美しいものや気高いものに感動する心をもったりすることに関する内容である。

以下においては、領域「言葉」及び「領域「人間関係」の中で道徳性の芽生えに関わる内容を見てみる。

①主として自分自身に関すること

（７）生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。

（領域「言葉」）

（９）よいことや悪いことがあることに気付き、守ろうとする。

(11) 友達と楽しく生活する中で決まりの大切さに気付き、守ろうとする。

（領域「人間関係」）

②主として人との関わりに関すること

（６）親しみをもって日常の挨拶をする。

（領域「言葉」）

（５）友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。

（６）自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。

（７）友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。

(10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。

（領域「人間関係」）

③主として集団との関わりに関すること

（８）友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。

（領域「人間関係」）

①②③の視点に従って、領域「言葉」及び領域「人間関係」等に掲げられている内容を見てきた。これらを一覧するとき、それは善悪、礼儀、親切、思いやり、友情、協力等に関する内容であることが分かる。ここには、掲げなかったが、他の領域においては、節度、節制、生命の尊さ等に関する内容が認められる。

２　幼児の言葉の収集をめぐって

上記の道徳性についての考え方を念頭に置いて、受講者である学生が道徳性の芽生えが認められる幼児の言葉（つぶやき）を収集す

るのであるが、それは近隣の幼稚園及び保育所等に出向いたり、幼児がよく遊んでいると思われる近隣公園等に出向いたりして行う。加えて、町に出かけたり、電車に乗ったりした際、幼児の話す言葉に耳を傾け、幼児の言葉を収集する。収集した言葉がいかなる場面や状況のもとに発せられたかを確認して記しておく。幼児の発する言葉は、片言であったり、一語文であったり、二語文であったりと多岐に亘るが、それは極めて短い。そのため言葉が発せられた時の場面や状況を正確に捉えないと、その意味内容を正確に把握することが出来ないこともある。このようなことから収集した言葉が如何なる場面や状況のもとに発せられたのかを捉えておくことで、それはその後の分析及び考察に寄与するのである。更に、収集した言葉を如何なる観点より分析し、考察を加えるかをメモしておくことである。

Ⅲ　連携授業の指導法―領域「言葉」と領域「人間関係」との複合領域の指導法―

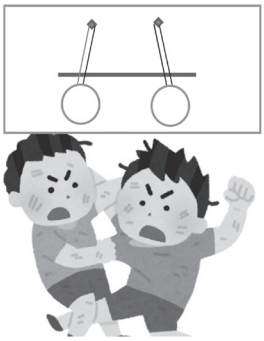
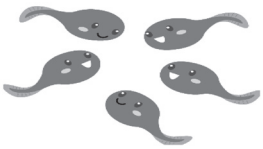
この連携授業、つまり複合領域の指導は、幼稚園教員に求められる専門性である幼児を内面から理解し、総合的に指導する力、具体的に保育を構想する力等の実践的指導力の育成に結び付くものと考える。斯様な複合領域の指導法は、「教職課程認定申請の手引き」（令和２年及び令和３年度開設用）においても重要視されている。「教職課程認定申請の手引き」においては、複合領域を「領域及び保育内容の指導法に関する科目を開設することができるとしている。これは、平成27年の中央教育審議会の答申において重要視されている「教職課程における科目の大くくり化及び教科と教職の統合を踏まえてのことである。

以上のことからも、領域に関する専門的事項と「保育内容の指導法」とを融合した科目、又は複数の「保育内容の指導法」を融合した科目等を積極的に開発していくことの重要性が分かる。本研究では、領域「言葉」と領域「人間関係」との連携による複合領域の指導法のあり様を探り、考察を加えることを目的とする。就中、幼児の言葉を収集し、それを基に領域「人間関係」等で重要視されている道徳性の芽生えについて考察を加える。

1　部分指導案

［子供の実態］ 子供たちの生活の様子を見ると、そこでは一緒に遊ぶようになっても、自分のイメージや考えをうまく言葉で表現することができなかったために互いに思いが伝わらず、それを無理に実現しようとしていざこざが生じる場面も見られる。	ねらい	日々の遊びや生活の中で自分の要求を言葉で表現したり、友達の要求を受け入れたりして、伝え合う喜びに気付き、人と関わる楽しさに気付く。
	内容	・生活の中で自分の気持ちや思いを言葉で伝える。 ・身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付く。 ・友達との関わりを深め、思いやりをもつ。

環　境　構　成	予想される幼児の活動	援　　助
【砂場】 遊び[8]	1　保育園の砂場に集まる。 ・シャベル、バケツ、水 (1) 砂を高く積み上げたり、穴を掘ったりする。	・砂場で遊ぶ中で、砂への興味や関心を深めさせ、その面白さや不思議さに気付かせる。

	(2) 山から水を流して遊ぶ。 (3) 遊んでいる時、トラブルになる。 (4) 砂や泥の感触を伝え合う。	・「もう少し砂を高くしよう。」もっと水を入れよう。」等と会話をしながら砂遊びをさせる。
吊り輪[9)] 	2　吊り輪遊びを行う。 (1) ぶら下がる。 (2) ぶら下がってくるくる回ったり、後ろに反ったりして遊ぶ。 (3) 吊り輪でぶらんこをする。 (4) 順番をめぐって、トラブルになる。	・吊り輪を手で持ち、ひざを曲げてぶら下がるように支援する。 ・回り終わるまでしっかりつかまっておくように支援する。又、後ろに反ったりして遊ぶように支援する。 ・しっかりと吊り輪を握るようにさせ、バランスと取るように支援する。
オタマジャクシの観察[10)] 	3　オタマジャクシの観察を行う。 (1) 保育士と一緒にオタマジャクシを観察する。 ・足、手、尾、目 (2) 生長の変化を観察する。 (3) 手に取って遊ぶ。 「おなかがグルグルだ。」 「目が離れている。」 「ツン、ツン、ツン（突き回わす）」 「オタマジャクシが動かなくなった。」 「病院、いかなくちゃ。」	・オタマジャクシの体から足や手が出ていることに気付かせる。そして、尾が短くなっていく様子にも気付かせる。 ・オタマジャクシを手に取って遊ぶことによって、オタマジャクシの成長の様子に気付かせる。そして、生命の尊さにも気付かせる。

複合領域の指導法の基本は、遊びを通しての総合的な指導法であることを踏まえ、ここでは、幼児の主体的な遊び、つまり砂遊び、吊り輪遊び、オタマジャクシの観察等における子供同士、及び保育士と子供等の言葉の遣り取りに着目し、そこにおける道徳性の芽生えの育ちを構想して指導案を作成した。これは、正に領域「言葉」と領域「人間関係」との連携による複合領域の指導法である。これを基に以下においては、受講者である学生が取集した言葉を手掛かりに道徳性の芽生えについて見てみる。加えて、幼稚園等で教師が収集した言葉についても道徳性の芽生えについて見てみる。

Ⅳ　子供の言葉から道徳性の芽生えを探る

1　受講者である学生が収集した言葉とその分析

その１　【砂遊び】

①　収集した言葉

A男　「もう、やめてよ。」

B男　「ごめん。」

C男　「Aくん、そんな言い方しなくてもいいじゃない。」

②　場面の状況の説明

これは、保育園の砂場で遊んでいるときの

会話である。泥んこ遊びをしていたときの、A男（５歳）が作っていた砂場の池に、B男（４歳）の掘り出した土が知らず知らずのうちに入ってしまった。そのことに気付いたA男がB男に対して激しい口調で怒ったのである。その様子をみていた同じクラスのC男（５歳）がA男のきつい言い方をいさめたのである。

③　分析と考察

私は、A男とC男が属している５歳児クラスで実習を行った。普段そのクラスの担任の先生は、幼児が幼児に対してきつい言い方をした際には、「○○くん（ちゃん）」、そんなこわい言い方、お友達にしないでね。」と指導されている。もしかしたらC男も、先生からそのような声をかけられたことがあったのかもしれない。又は、C男は、自身が友達にきつい言い方をされ嫌な思いをしたとき、先生が友達にこのような内容のことを言われたのを聞いたのかもしれない、更に又、C男は、そんな二人が先生にこのような内容のことを言われているのを近くで聞いていたのかもしれない。これらのいずれかが背景にあるにせよ、C男はおそらく以前にあった実体験から「お友達にこわい言い方をしてはいけない。」という考えを理解し、それを自分のものにしていたのだろう。それは、担任の先生がこの場にいらっしゃらなかったにも拘わらず、普段先生の言葉をしっかり心に留めた上で、A男に声を掛けているからである。ここで私は、幼児が他者と関わる中で、その場その場の状況に応じて何度も何度も丁寧に言葉によって幼児に伝えていくことの重要性を感じた。このような保育士の毎日の言葉掛けからそれぞれの幼児が友達への思いをやりの心を育むであろう。

その２　【オタマジャクシの観察】

①　収集した言葉

保育士　「生きている。」
子供　　「ううんー。」
保育士　「ちょっと、今、病院ね。」
子供　　「これ、生きている。つん、つん、つん、(突き回す)。
保育士　「病院、いかなくちゃ。どうやったら治るかな。」
子供　　「じゃあ、この子はちょっと入院します。ちょっと器持ってきます（牛乳の開きぱっく。)」
子供　　「器か（保育士の後について行く。)」

②　場面の状況の説明

保育士と子供がオタマジャクシの観察をしているときのことである。子供が水の中にいるオタマジャクシを手に取って遊んでいるうちにオタマジャクシが動かなくなってしまった。そこでの子供と保育士の遣り取りである

③　分析と考察

子供は、元気がなくなってしまったオタマジャクシを見て戸惑っている。保育士の「病院、いかなくちゃ。」という保護する趣旨の発言によって子供も「病院」という言葉を発し、オタマジャクシを助けてやらなくてはならないよという優しい気持ちに至ったのである。これは、自分より弱者である生き物に対しても、「助ける気持ち」を持ち、そして「命の大切さ」に気付く体験である、この子供は、牛乳パックの中のきれいな水で泳ぐオタマジャクシを見て「生きる喜びを感じ」、と同時に「生命」について自覚したであろう。

その３　【新しい玩具】

①　収集した言葉

保育士が新しく園に入った玩具を、教室に

持ってくる。
子供Ａ「うわー。新しいおもちゃ。」
子供Ｂ「わたし、ほしい。」
子供Ｃ「ぼくが遊ぶのー。」
子供Ｃが、玩具を取る。
保育士「これは、みんなのおもちゃなのよ。みんなで仲良く順番に遊んでね。」
子供ＡＢ「はーい。」
保育士「Ｃ君。みんなで順番に遊びましょうね。」
子供Ｃは、周囲を見渡してから、返事をする。
子供Ｃ「うん。」
子どもたちは、じゃんけんをして遊ぶ順番を決め始める。

②　場面の状況の説明

保育園で新しく購入した玩具を持って、保育士が教室に入ってきた。子どもたちは、新しい玩具が珍しいので、興味津々である。一人の子どもが箱から玩具を取って、独り占めしようとしたので、保育士は、子どもたち全員に仲良く順番に遊ぶように声かけをした。

③　分析と考察

子どもたちは皆、新しい玩具に興味があり、それぞれ自分が独占して遊びたいという気持ちになっている。自分の気持ちにしたがっていて、他者が視野に入っていない。保育士が、皆で仲良く順番に遊ぶという声かけをしたところ、子どもたちも他者の存在を意識するきっかけができ、他者との共存・共生についての意識が芽生えた。独占しようという意欲が強かった子どもも、周囲の反応を見ることで、他者を意識することができた。

その４　【幼稚園の鶏小屋】

①　収集した言葉

広い園内を、保育士が子どもたちを連れて散歩し、鶏舎の前にやってきた。
子供Ａ「鳥さん。鳥さん。」
子供Ｂ「かわいー。」
子供Ｃ「きのう、鳥さん。食べたよー。ぼく、お肉も卵も大好きー。」
子供Ｂ「えー、食べないよー。」
子供Ａ「かわいそー。」
子供Ｄ「じゃあ、いつも食べてるの、何の卵？」
子供Ａ「悪い鳥のだよ。カラスのだよ。」
保育士「みんなが食べているお肉と卵は、この鶏さんと同じ鶏さんのお肉と卵なのよ。鶏さんは、私たちが生きてゆくためにお肉と卵をくれているのよ。」
子供たち、不安げな表情になり、キョロキョロ鶏舎を見回す。
保育士「だから、毎日、卵やお肉を食べる前に、鶏さんに感謝していただきますっていうのよ。」
子供たち「ふーん。」
保育士「野菜さんもお米さんもみんな、私たちが生きてゆくために、自分を食べさせてくれているのよ。」

②　場面の状況の説明

畑で野菜を作ったり、動物を飼育したりする大きな幼稚園である。教師が、子供たちを連れて園内を散歩し鶏小屋に来た時、子供たちの中には肉と卵に対する疑問が生じた。自分たちはこうしたかわいい生き物を殺して食べているのだろうか、という疑問である。食しているものは、人間に害がある悪いものと考えて安心しようとする子供たちに、保育士は、真実を伝えたうえで、命の尊さとそれを食することの意味を考えさせる。

③ 分析と考察

子供たちは、動物をかわいいと思い生命をいつくしむ感情を持つが、同時にそれを自分が食していることを知らなかったり、そこから目をそらしたいという気持ちを持っていたりする。保育士が、食物連鎖の必然性を伝えるとともに、生命の尊厳と感謝の気持ちを持つことを教えることで、子供たちに自分たちが生かされていることへの感謝、そしてそれによってあらためて考えさせられる生命の尊さを直視する気持ちを目覚めさせるきっかけとすることができる。

２ 教師が収集した言葉とその分析

その１【吊り輪遊び】

① 収集した言葉

ＩとＹが吊り輪を奪い合って押し合いを始めた。

保育者「Ｉ君もしたいし、Ｙ君もしたいだね。」と言いながら二人を落ち着かせる。そこでKoとKeもやってくる。

Ke「Keちゃんしたいの。」と吊り革を持っているＹを蹴る。

保育者「Ke君、お友達をけっても代わってもらえないわよ。お友達が終わってからＫ君も乗れるからね。待ってね。」と話をする。やっとKeの番になる。

保育者「ちゃんと乗れたね。よかったね。」と話すと楽しげな表情をみせた。また、やりたいと並んで待つKoやKe。

Ko「順番、順番、楽しいな！」と歌いながら、

Ke「Ko君順番だね。」言いながら待つ。

② 分析と考察

この事件をめぐって、教師は「自分と同じように『やりたい。』と思う友達がいると、『待っていたらできるんだ。』『順番にするものも楽しいな。』という思いを少しでも感じてくれたという願いもあった。」と指摘する。ここでは、吊り輪の遊びをめぐって、幼児が自己主張して吊り輪を奪い合ったり、順番を守らなかったりした場面において、教師は適切に関わって幼児が決まりに気付き、それに従って楽しく遊ぶことができることを願っている。幼児が吊り輪を奪い合って自己を抑制できずに対立している場面においては、教師はそれぞれの立場を認めて、幼児を安心させている。そして、順番を無視して自己の感情をコントロールできない幼児に対しては、決まりの存在に気付かせよう言葉掛けをしている。その結果、幼児は順番（きまり）を守って楽しかったという思いに至っている。ここで、幼児は、他者との関わりにおいて様々な葛藤を体験し、自己の感情を抑制して決まりを守ることによって、集団の中で楽しく過ごすことができるということに気付いている。ここには道徳性の芽生えが培われつつある。

その２ 【園庭での遊び】

① 収集した言葉

子供Ａは、他の子どもと離れていつも一人で遊んでいる。保育士は、子供Ａに寄り添って一緒に遊んでいる。

保育士「Ａ君は、どうしてみんなと遊ばないの？」

子供Ａ「だって、つまんないんだもん。」

保育士「何がつまらないの。」

子供Ａ「みんな、ぼくの話、聞いてくれないんだもん。」

保育士「聞いてくれないのは、なぜだと思う？」

子供Ａは、少し考えている。

しばらくたって、保育士は、クラスの他の子のところに行く。

保育士「なんでみんなはＡ君と遊ばないの。」

子供Ｂ「Ａ君、すぐぶつんだもん。」

子供Ｃ「ぶつから、いっしょに遊びたくない。」

保育士「どうしたらＡ君はぶたなくなるかな？」

子供Ｃ「わかんない。」

保育士「Ａ君は何かみんなに言いたいことがあるんじゃないかな。それを聞いてあげたらどうかな？」

②　分析と考察

友だちを他者として認識する対他者意識をうまく確立できない子供をどう指導するか、そしてまた、異なる面の多い子供を、他の子供たちにどう受け入れてもらうか、対他者意識の形成とそれにともなう道徳意識を育てるためには、様々な言葉かけが必要となってくる。子供Ａには、他の子どもが遊んでくれない理由について考えさせることで、Ａの対他者意識を育てようとしている。また、クラスの子供たちには、Ａの気持ちを考えさせることで、様々な他者の存在を意識させようとしている。

まず、四者の分析例を掲げた。受講者である学生が幼児の言葉を収集した場所を見てみると、それは、「砂遊び」「オタマジャクシの観察」「新しい玩具」「幼稚園の鶏小屋」と多岐に亘っている。「砂遊び」の遣り取りからは、他者への思いやりの心、「オタマジャクシの観察」の遣り取りからは、身近な動植物への関わりや生命尊重、「新しい玩具」の遣り取りからは、他者との関わりを深め、規範意識の芽生え、「幼稚園の鶏小屋」の遣り取りからは、命の尊さを直視する等の道徳性の芽生えが培われているように思う。一方、後者の教師が収集した言葉とその分析からは、幼児が他者の関わりにおいて様々な葛藤を体験し、自己の感情を抑制して決まりをも守ること、他者の存在をしっかり意識すること等の道徳性の芽生えが培われているように思う

Ⅴ　おわりに

本研究では、幼児が使用している言葉を基に、道徳性の芽生えが如何に培われたかについて探った。まず、道徳性の芽生えを探るに当たっての基本的な考え方を整理した。道徳性は、人間にとしての本質的な在り方やよりよい生き方を目指してなされる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基礎をなすものであるとし、幼稚園及び保育所においても乳幼児に相応しい道徳性を生活の中で身に付けるような指導を行っていく必要があるとした。幼児の道徳性を分析する際、極めて重要な手掛かりを与えてくれる四者の視点（①主として自分自身に関すること、②主として人との関わりに関すること、③主として集団との関わりに関すること等に加えて、④主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること）を整理した。斯様な視点を踏まえて、「受講者である学生が収集した言葉」及び教師が収集した言葉」等を基に道徳性の芽生えについてそれぞれ分析した。言葉を基に道徳性の芽生えについて分析をしたが、斯様なことに鑑みるとき、領域「言葉」と領域「人間関係」との連携授業のあり様、つまり領域と領域との複合領域の指導法のあり様を探ることは極めて重要なことである。

［注］

1）文部科学省　『幼稚園教育要領解説』　フレーベル館　平成29年　p.60

2）同上書　p.188

3）同上書　p.61

4）同上書　p.163参照

5）同上書　p.16

6）同上書　p.16

7）同上書　p.28

8）https://sozai-good.com/illust/person/boy/71669

9）https://1.bp.blogspot.com/-pA2MtW9jO7Y/We6Sc-RReaI/AAAAAAABHxw/IaC42g14qa0e9QQHQF9k9bnfvFSRKtGsgCLcBGAs/s800/kodomo_kenka_boys.png

10）https://illustimage.com/?id=8740